

第二節 結社の発展

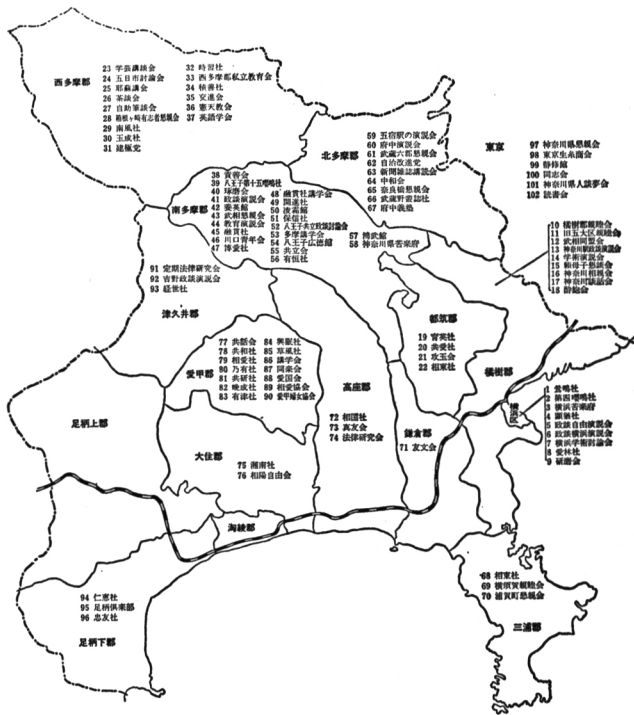
一 多彩な結社の誕生

神奈川県におけるもっとも早い結社としては、南多摩郡の責善会と横浜区の鶯鳴社をあげることができる。ともに一八七八（明治十二年）の成立である。

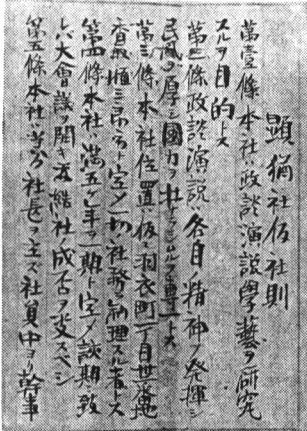
しかし、これから述べるように結社が多く組織されるのは国会開設運動が展開する一八八〇（明治十三年）以降である。結社といっても政治結社（政社）だけではないが、多彩な結社の誕生が、わが国に民主的な国会を創設しようという新しい政治の気運と深く結びついていたことはたしかである。ここにいう結社とは、当時の主として農民や一部の商人たちが、共通の目的を掲げ、対等な資格で組織した団体である。

今日の研究会や政治団体の源流と考えればわかりやすい。農民たちのこのような組織づくりは、封建社会に見られなかった新しい動向であり、その自立した姿勢は注目にあたいする。それだけでなく、ここで結社のままとまった認識が必要なのは、その活動が自由民権運動や政党結成の基礎になっているからである。幸いなことに神奈川県の場合、結社の研究は全国的に見てもっとも進んだ県の一つに入っている。それでは、蓄積された諸研究をふまえ、現在までに判明した結社を郡区別・年代順に整理し、その概要をまとめてみよう。叙述に多少の差が出るのは、資料に制約があるためである。

結社を個別に調べる前に、わかりやすくするため結社を全体として概観しておこう。その場合、結社の活動が社会において



占める比重が大きく独自の意義を持っていたのは明治十年代であると考えるので、考察をこの時期に限定することをあらかじめことわっておきたい。その明治十年代の県下において、現在判明する結社の総数は百二になる。いまのところ百をこえる結社の内容が不十分ではあれ判明したのは、全国でも本県だけであろう。さて、その内訳を見ると、横浜区九、橋樹郡九、都筑郡四、西多摩郡十五、南多摩郡二十一、北多摩郡九、三浦郡三、鎌倉郡一、高座郡三、大住郡・洵綾郡あわせて二、愛甲郡十四、津久井郡三、足柄下郡三、在東京六になる。この数からわかるように、南多摩郡が断然多く、結社全体の二〇％を占める。さらに三多摩をあわせると実に全体の四六％になる。現在の横浜市・川崎市に重なる横浜区・橋樹郡をあわせると同様に一七・二％強、愛甲郡が同様に一三・一％強になる。これは次節で見られる自由党員の分布にほぼ照応する数値であり、政党組織でいえば南多摩郡自由党・北多摩郡自由党・西多摩郡自由党・愛甲郡自由党に対応する。さしあたり政治面だけで見



横濱に結成された頭猶社仮社則
東京経済大学図書館蔵

れば、結社の組織なくして政党の組織化はありえなかつたことがよくわかる。多彩な結社は、大きく政治結社・学習結社・産業結社に分けられるが、その内容と考察については本節の結びにまわしたい。

横浜区

一 鶯鳴社 一八七八（明治十二）年十月十三日、横浜区太田町の料理店「佐の茂」で発会式をあげた。当日、有名な鶯鳴社を主宰する沼間守一ぬまもりかずが招かれて演説をしている。社員は、戸塚・早矢仕・木村・本多以下二十余名と報じられているが、この中心になっている社員は、のちにいずれも県会議員となる戸塚千太郎・早矢仕有的・木村利右衛門・本多武右衛門と思われる。鶯鳴社の集会は毎月土曜日、傍聴自由と定められていた（『横浜毎日新聞』、明治十一年十月十一日・同十六日付）。

二 第四嚶鳴社 一八七九年、沼間守一が主宰する第一東京嚶鳴社の影響下に成立、横浜区だけでなく五日市・府中・八王子・日野・吉野・久保沢などの有志の招聘に応じ、毎月演説会を開催した（色川大吉「明治前期の民権結社と学習運動」『東京経済大学人文自然科学論集』二二号、以下「色川論文」と略称する）。

三 横浜苦楽府 一八八〇（明治十三）年七月十七日、横浜に設立された。

南多摩郡日野宿の民権家天野清助も入社している（新井勝紘「自由民権の昂揚―結社の活動を中心に」『三多摩自由民権史料集』上巻、以下「新井論文」と略称する）。

四 頭猶社 政談演説会を主要な活動とした県下の代表的な政治結社の一つである。「頭猶社仮社則」は一八八〇（明治十三）年十一月二十一日にできており、届出認可を受けたのが翌月の八日であった。斎藤忠太郎・最上幸吉・青山和三郎の三人が発起人で、戸塚・小田原などの加入者も含めて当初約二百余名

の会員がいた。後に同社は、「顕猶社討論会概則」を定めている。この討論会は、毎月第一第三土曜日に、社員のみで政治・法律・経済などの問題を討論により深めようというものであった。顕猶社の表看板は、何といても演説会である。横浜鉄橋際の富竹亭で多く開かれた演説会の演題を見ると、国政の在り方を論ずる政治問題や法律・経済などにわたる学芸関係が圧倒的に多いことがわかる。演説者は社員だけでなく、東京横浜毎日新聞記者や嚶鳴社員が招かれており、全体として嚶鳴社の影響が強かった（渡辺葵「自由民権運動の高揚期における横浜政治結社の動向」『神奈川県史研究』五号、資料編13近代・現代(3)一六）。

五 政談自由演説会 一八八一（明治十四）年二月二十七日、伊従勝五郎を会長として設立された（色川論文）。

六 政談横浜演説会 一八八一（明治十四）年四、五月ごろ設立された。漸進的な顕猶社にあきたらず退社した伊従勝五郎・高橋親義らが主宰した（渡辺前掲論文）。

七 横浜学術討論会 一八八一（明治十四）年九月二十五日の『東京横浜毎日新聞』に設立広告が出されている。それによれば、会費毎月十五銭、開会一回、法律・経済その他学術に関する事項を討論するというものであった。連絡責任者は宮川町の鈴木券太郎で、鈴木は顕猶社の有力なメンバーでもあった（渡辺前掲論文）。

八 愛林社 一八八二（明治十五）年二月二十六日に発会式を行ったと推定される。長者町の最上幸吉ほか数名が発起人で、規則を作り、樹木の培養に従事することを目的にしていた（『東京横浜毎日新聞』明治十五年二月二十一日付）。

九 研磨会 一八八四（明治十七）年六月に、横浜商人の有志が設立し、知識の研磨、元気の振起、商業の改良を目指した（新井論文）。

橘樹郡

一〇 橘樹郡親睦会 一八八一（明治十四）年二月十一日、溝ノ口桜鶴楼で開催された。会主は郡長松尾豊材、幹事は浅田

定賢・添田知義・鈴木直成・荒波孫四郎・石井直方・田中光弼・河合平蔵の七人でいづれも戸長、賛成者は百八十五名に達した。当日、県議員の岩田道之助は他府県の有志結合・演説会・討論会の例を引き、本郡の進歩を促すため有志の団結をはかり、毎月あるいは隔月に政談演説会を開こうと演説している。この親睦会に刺激されて発足したのがつぎの旧五大区親睦会である（小林孝雄『神奈川の夜明け』）。

一 一 旧五大区親睦会 一八八一（明治十四）年七月一日、溝ノ口で開かれた。旧五大区は溝ノ口村ほか三十六か村であるが、当日村々より百二十名の参加者があった。この親睦会の幹事長には溝ノ口村戸長の鈴木直成があげられた（小林孝雄前掲書）。

一 二 武相同盟会 横浜住吉町の森屋善三郎ら幹事が、一八八一（明治十四）年九月十七日、神奈川町名古屋楼にて会費一円で同会を開催する広告を出している。その他同会についての詳細は不明である（『東京横浜毎日新聞』明治十四年九月六日付）。

一 三 「神奈川駅政談演説会」（正式の名称不明） 一八八一（明治十五）年一月三十日に東京横浜毎日新聞の島田三郎ら三名を招き政談演説会を開いているので、それ以前に発足したことがわかる。神奈川駅の鈴木金助・木村秀哉らの発起によるもので、三十日の演説会が二百四、五十名の盛会だったことから以後毎月一回開催を予定、会員募集にのり出している（『東京横浜毎日新聞』明治十五年二月四日付）。

一 四 学術演説会 一八八二（明治十五）年五月ごろ、郡下の発起人数十人の名を連ねて発足、中心人物は島田三郎・中村久太郎・井田文三で、本拠を川崎村に置いた（色川論文）。

一 五 頼母子懇談会 一八八二（明治十五）年十二月、井田文三（郡書記を辞職、県議員）を会主とし井田啓三郎・山根喜平・新井市左衛門・鈴木久弥・城所範治・河合平蔵・田村義員・鈴木直成らによって組織されたが、集会条例により禁止され、通



井田文三

常頼母子講に改められた。同会は、頼母子講によって会維持の資金を得るとともに講の会衆で演説会を開くという一石二鳥をねらったユニークな方法を考え出している。一八八三年四月一日、溝ノ口宗隆寺で会衆六十余名の政談演説会を開き、島田三郎・赤羽万二郎・波多野伝三郎らを招いている。一八八四年一月六日にも会衆七十余名が等覚院で学術演説会を開いた(小林孝雄前掲書)。

一六 神奈川相親会 鈴木金助らが一八八二(明治十五)年に神奈川駅青木町に設立した。知識の交換を目的としたが、十七、八回開催して解散した(新井論文)。

一七 神奈川談話会 一八八四(明治十七)年二月、神奈川駅に設立された。会員四十名で、横浜より自由党员佐藤健治郎、関貞吉らが参加しており、毎土曜日に開会した(新井論文)。

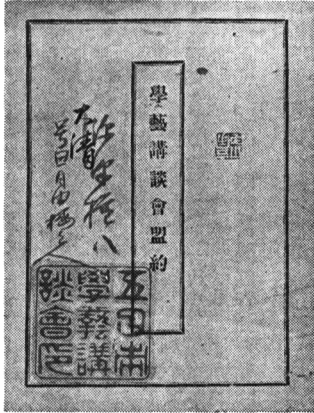
一八 酔飽会 一八八四年四月八日、神奈川駅に設立された。神奈川談話会に横浜の有志が加わったものである(新井論文)。

都筑郡

一九 育英社 一八八〇(明治十三)年四月八日以前に、石川村の金子馬之助により設立された(『東京横浜毎日新聞』明治十三年四月八日付)。

二〇 共愛社 一八八〇(明治十三)年四月八日以前に数名の発起人により設立された。育英社の金子馬之助が社員として参加している。同社の目的は貧民救助、育英資金の提供などであるが、毎月数回の演説講談会を開催することも協議している(『東京横浜毎日新聞』明治十三年四月八日付)。

二一 攻玉会 一八八一(明治十四)年二月、大谷教曹・佐藤貞幹・飯塚民治郎らにより池辺村に設立された。知識の交換、



学芸講談会盟約
東京経済大学図書館蔵

学術研究を目的とし、毎月一回演説討論会を開いた。翌八二年一月に規則を作成し、弁士の招聘も行った（新井論文）。

二二 相東社 一八八一（明治十四）年、久保村の佐藤貞幹、下川井村の桜井光興らによって設立された。この二人はいずれも後に県会議員・自由党员として活躍している（色川論文）。

西多摩郡

二三 学芸講談会 五日市村の内山安兵衛・土屋勘兵衛・深沢権八らにより結成されたもので、学芸全般について講談演説・討論することを目的とし、毎月三回五日の日（当初は一日）に開会した。嚶鳴社員の波多野伝三郎が、一八八一（明治十四）年十一月一日の懇親会に招かれたとき、同地の演説のすばらしさに驚いて質問したところ、「昨年より毎月三回宛学術講談会を催」してきたためだとの答があったという（『東京横浜毎日新聞』明治十四年十二月四日付）。この記事によれば、学芸講談会は一八八〇（明治十三年）に存在していたことになる。この会に、放浪の思想家千葉卓三郎が名を連ねるのは一八八一年からである。（色川論文、色川大吉編『民衆憲法の創造』）。

二四 五日市討論会 「私擬五日市討論会概則」と表記された墨書の文書によれば、この会は、政治・法律・経済など学術全般の内より重要な事項を選んで討議し、多数決によってその日なりの結論を出す方法をとっていた。開会日は毎月三回五日の日であるが、前記の学芸講談会の幹事の判断により延会や臨時開催も認められているから、学芸講談会によって設立されたものと考えられる。その時期は、一八八〇（明治十三年）十二月以降と推定されている。この学芸講談会と五日市討論会の活動が、全文二百四か条、そのうち「国民ノ権利」に三十六か条、「立

法権」に七十九か条をあてて、人権保障に周到な注意を払った「五日市憲法草案」を生み出したのである（色川前掲書）。

二五 耶蘇講会 『東京横浜毎日新聞』（明治十三年三月二十六日付）の「武州西多摩郡五日市の近況」と題した記事のなかにその名が見えるが、詳細は不明である。

二六 茶談会 右と同じ記事中に、小学校教員によるものとある以外は不明である。

二七 自助筆談会 一八八一（明治十四）年九月、八尾玄益・深沢権八・木崎雄蔵・坂本次郎左衛門・石川保助ら発起人十三名によって青梅町に設立された。同会は各自の思想を印刷して討論し、知識の交換をはかった（新井論文）。

二八 箱根ヶ崎有志者懇親会 比留間（雄亮か）・山田・関谷・佐々・宮崎らの首唱で、一八八一（明治十五）年二月以前に結成、毎月一回開会した。一八八二年二月十三日の場合、嚶鳴社の島田三郎・草間時福の演説を会員百余名が聞き、夜に入ると、県会議員内野左衛門・指田茂十郎も加わり、会員二十余名が討論会を開いている（『東京横浜毎日新聞』明治十五年二月十六日付）。

二九 南風社 南風社は多摩村に、玉成社はその隣村平井村に設立された結社で、学習会や演説会を開いて活動していたようである。一八八二（明治十五）年四月七日、東京横浜毎日新聞の細川瀏・鈴木券太郎が多摩村有志に招か

れ当地の懇親会に出席したときの感想に、両社が演説に習熟していると述べているから、この懇親会を開催した日以前に結成されていたことがわかる。この会に尽力した人びとは、須藤・坂口・比留間・佐々木・鈴木（氏名不詳）であった（『東京横浜毎日新聞』明治十五年四月十二日付）。

三一 建極党 一八八二（明治十五）年ごろ、千葉卓三郎らが、自由の拡充と社会の改良を掲げて、五日市町に設立した（新井論文）。

三二 時習社 一八八三(明治十六)年十二月、静原寛十郎・坂本次郎左衛門、田村半十郎らにより青梅町に設立された。会員は百四十名、地方の漸進的改良をはかることを目的とし、懇親会を開催した(新井論文)。

三三 西多摩郡私立教育会 一八八四(明治十七)年三月二十三日、石川保助・嶋田六助・木崎雄蔵・佐々木基らによって設立され、本部を青梅町に置いた(色川論文)。

三四 積善社 一八八四(明治十七)年三月二十八日、上成木村に設立され、貧民救助を目的とした(色川論文)。

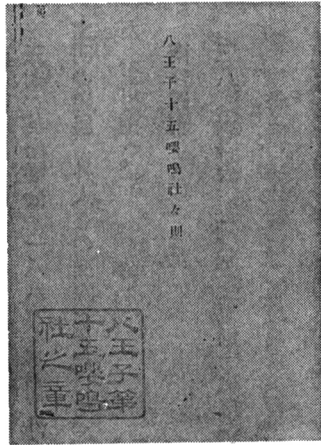
三五 交進会 一八八四(明治十七)年四月、土屋勘兵衛・山野熊太・東海林保定・秋山文一らにより五日市町に設立された(新井論文)。

三六 憲天教会 内山安兵衛・深沢権八・名生父子なまきよらにより、一八八五(明治十八)年三月、五日市町に設立された。この会は、「釈尊ノ大教ニ憲トリ天地ノ公道ヲ明カニシ以テ社会ノ開明ヲ補翼スル」ことを目的とし(第二条)、毎月講談会を開き、費用は有志の寄附金によると規約に定めている(色川論文)。

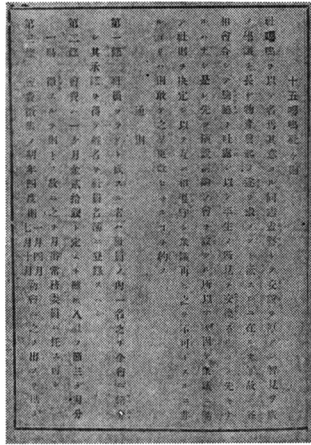
三七 英語学会 一八八六(明治十九)年、内山安兵衛・深沢権八らにより、五日市町で発起された。その趣意書によれば、文明の発展、外人との交際を予想して、世界に広く使用されている英語を「速成」(六か月)で修得させようというものであった(色川論文)。

南多摩郡

三八 責善会 「責善会規則」には一八七八(明治十二)年五月の日付があり、現在までに判明している神奈川県最初の結社である。橋本政直・石坂昌孝(野津田村)・薄井盛恭(上小山田村)・中溝昌弘(大蔵村)・若林有信(下小山田村)・嘉山莊助(小野路村)・村野常右衛門(鶴川村)・榎本重美(真光寺村)ら各村落の有力者十九名により創設された。会の目的は、「社友相



内野悌二氏藏



八王子第十五嚶鳴社々則

共ニ協心同力シテ過失ヲ格正シ疑事ヲ討議シ非ヲ責善ニ導キ知識ヲ開達シ産業ヲ振興セシメ其^(他)百般各自ノ便益ヲ計^(一)ることにあつた(第一巻)。そのため毎月第二日曜日の午前九時から午後四時まで会合し、場合によっては臨時会を開き、「親戚長幼尊卑ヲ論セス」自主対等に討議を尽くすことがもとめられていた。知識を深める討議、産業振興策についての意見交換、「自己ノ身上ニ於テ未決ノ事」などあるときの相談(第十巻)という会の趣旨は、参加者の要求に深く根ざしており、その意味で農民的結社の原型を見るように思われる(色川論文)。

三九 八王子第十五嚶鳴社 東京の嚶鳴社の影響下に、一八八〇(明治十三年)一月十七日、成内顕一郎ら五十名ほどで八王子に発足した(色川論文)。社則によれば会の趣旨は、「交誼ヲ厚クシ智見ヲ広メ学識ヲ長シ物産興起ノ途ヲ求メ」ることにあり、そのためには何よりも意見を交換する、「演説討論ノ会」を設ける必要があると述べられている。会合は毎月十二日、二十二日を定則とし、午後六時に開会、論題(其の場で出されるものと宿題になっていたものと二種ある)についての討論会、ついで演説、また討論会という方式で運営された(資料編13近代・現代(3))

一五。

四〇 琢磨会 一八八〇(明治十三年)四月、細野喜代四郎(小川村)・井上光治(鶴間村)らが中心になり、「學術演説討論等ヲ研究」する結社として出発した。会員は、細野・井上のほか、能ヶ谷村の神蔵喜六・同長造・同要吉、岡上村の梶竹次

郎・和知春吉・同光美、高ヶ坂村の小島豊一・市川堯造、小川村の前田幸之助・野村吉寛・上鶴間村の渋谷常次郎・同徳次郎・恩田村の三部原二良、鶴間村の細野彦太郎の十六名で、南多摩・高座・都筑の三郡七か村にわたっていた(『町田市史』下巻)。

四一 政談演説会 一八八一(明治十四)年一月十二日、八王子・三沢・豊田村を範囲として設立された。発起人は成内頼一郎・川口寛一・谷合弥七・吉田忠左衛門・赤松良折・梅村由五郎・土方円・今井匡之・師岡豊之助ら十名で、毎月一回東京より弁士を呼んで演説会を開くことにしていた(新井論文)。

四二 養英館 一八八一(明治十四)年一月、青木勘次郎(校主)・島崎伊右衛門・吉川宗右衛門により、相原村に八年制の私立小学校として設立された。同年七月五日、中島信行の演説会が養英館で開かれており、学習結社としての役割も果たしていたと考えられる(『町田市史料集』第八集)。

四三 武相懇親会 石坂昌孝・榎本重美らを発起人とする武相懇親会は、一八八一(明治十四)年一月三十日、原町田村の旅館吉田屋で開催された。最初に、招待された松沢求策・上条信次(東洋自由新聞)、肥塚龍(東京横浜毎日新聞)、末広重恭(朝野新聞)を弁士とする演説会があり、その後宴会に移った。後日印刷された「武相懇親会第一回姓名録」によれば、参加者総数は二百三名で、南多摩郡内二十九か村百四十九名がもつとも多く、ついで高座郡二十九名、都筑郡十六名、鎌倉郡六名、橘樹郡一名、愛甲郡一名、大住郡一名となっている。発起人の石坂は、県下の指導的な民権家であり、野津田村の豪農で一八七九年の第一回県会議員に当選、初代県会議長に推されているし、「姓名録」に見える村野常右衛門・中溝昌弘・細野喜代四郎・青木正太郎・林副重・日野義順・山本作左衛門・神藤利八・桜井光興・佐藤貞幹は前後して県会議員になった人びとであり、その他の参加者も戸長層に属する者が多かった。武相懇親会は、いわゆる一回かぎりの懇親会ではなく、「姓名録」の緒言によ